第２７回東川賞審査講評

海外作家賞	ピーター・ドレスラー氏（Peter Dressler）
国内作家賞	オノデラユキ氏（おのでら・ゆき）
新人作家賞	北野　謙氏（きたの・けん）
特別作家賞	奥田　實氏（おくだ・みのる）
飛弾野数右衛門賞	百々俊二氏（どど・しゅんじ）

今年の東川賞審査会は３月７日に行われた。東日本大震災が発生したのはその４日後のことである。3月 11 日以後、日本の社会は一変し、地震、津波、原発事故という国難を共有している。全国民的に、被災地や被災者に対し胸が張り裂ける思いと、自らの立場の限界という矛盾にわだかまりを抱いているのではないか。

思えば、戦後の高度成長社会から経済バブルの絶頂を経て、我々は過剰な利便を享受してきた。その社会システムの図式が根底からリセットされてしまったのだ。“戦後”ということが、これまでの歴史的タームの基盤だったとすれば、我々は今後、“震災後”という新たな区切りの時代を生きて行くのである。これからは、新たな知恵、見識を総合した質の高い社会が求められる。物の豊かさから、見えないもの、“精神”の豊かさへと価値感は本質的に回帰するだろう。

今後、変化せざるを得ない歴史の只中にあって、我々写真家、表現者は何ができるのか、何をすべきなのか。そんな流動する時代、場所に居る事を興味深く体験している。４月中旬現在、度重なる余震の只中にあり、今後に起こる事は見当もつかない。しかしながら、７月の東川をイメージしながら、今年の東川賞について記す。

今年の東川賞審査会では、長年東川賞審査会に関わっていただいた岡部あおみ氏が退任され、新たに美術評論家であり松濤美術館学芸員の光田由里氏が加わった。そして今回も８名の審査員全員の参加のもとに、会議は始まった。

近年の才長ける女性写真家の台頭を受けて、今年の審査会は波乱に満ちた。票が割れるのである。多士済々様々なジャンルの専門家が集う審査会は、東川賞の大きな特徴であり極めて重要な要素である。毎年ユニークな議論に事欠かない。全員参加の審査会メンバーは偶数の８名であるが、今年ほどこの偶数ということを意識させられた年は無い。議論も尽くし最終的には票数で決着をつけざるを得ないのだが、４対４という回もあり、甲乙つけがたし、いずれの可能性もあるという選択が、全ての賞の中で生じたといって良いだろう。言い換えればすでにポピュラーである人材を乗り越えるユニークな人材のパワー不足とも。

先ずは国内作家賞の選考から開始した。世界的に活躍する写真家も増えている。その中でも活躍が際立つオノデラユキ氏に決定した。オノデラ氏は、すでに名だたる賞を網羅しているが、ユニークで表現力のある世界を次々と創作し続けるパワーとしなやかさを合わせ持つ力に票が集まった。古着のポートレートから、摩訶不思議なシルエットのシリーズへの展開など、抽象性を持ちながらも具体的なイメージの訴求力を失わないのは独特の魅力である。また作品タイトルも謎に満ち、様々なシリーズはまるで迷宮に遊ぶようだ。再びの東川へようこそ。オノデラ氏は 2001 年の新人賞から今回の国内作家賞へと、初めての両賞受賞者となった。

次は新人作家賞である。この賞はいつも議論が盛り上がる。今年は「our face プロジェクト」の北野謙氏に決まった。コンピューターのモーフィングのように手作業で多くの顔を重ねて行くこの技法は、90 年代より世界的に見て複数の作家が試みた。氏の場合は、日本全国津々浦々で、脈絡を超えた様々な階層の集団を撮影し、その姿を重ね焼きしたイメージを作り上げた。北野氏のこのプロジェクトは長い期間粘り強く繰り広げられており、氏は〔世界は「沢山のローカルの集積」によって成り立っているのだと私はイメージします〕と書く。そのように制作された〈顔〉は個によって構築された世界、ということになるのだろう。長時間露光によって町を写す「溶游する都市」とともに長年の努力が新人賞にふさわしく評価された。次点は吉村和敏氏と笹岡啓子氏が同票となり極めて激戦であった。

そして海外作家賞、今年は笠原委員のリサーチよりオーストリアから選ばれた。複数のノミネート作品の中から、諧謔が随所にちりばめられたシークエンスの連続、自作自演映画の 1 シーンのような作品を制作するピーター・ドレスラー氏となった。奇妙な場面の写真。その写真の情景を説明したところで、その状況は本質の器に過ぎない。例えば高級ホテルの備え付けの寝具や機器を、手際よくスーツケースにしまい込む情景。たとえば、室内テニスコートで一人プレーする姿。いずれも氏自ら演じ撮影した作品である。その写真の物語は、多層的意味合いを持ち皮肉とユーモアに満ちている。しかしオーストリアの歴史やウイーンの町を知らない我々にとって、本質への距離は縮まらない。それでも写真と写真の行間に感応することと、写真から呼び込まれる様々な解釈が、我々に場面を共有させ、想像力を働かせる事につながる。謎が想像を呼び、想像は物語を生む。

特別作家賞は東川町在住の奥田實氏に決まった。「生命樹」は一見すると樹木の図鑑のような豪華本であり、解説の文字も多いため写真集のようには見えない。しかしながら、メインの「写真」をよく見ると、イラストレーションのように配置された図が、実は丹念に切り取られ、四季の変化を構成して巧みにコラージュされた写真である事が分かる。Karl Blossfeldt の自然の構築的形態を見出すような植物写真集を想起させ、コラージュの作品を丁寧に見て行くと、木の生命について実に丹念に観察し研究された成果である事が了解できる。また長年に渡って旅を続け、森に住み森を観察し続ける氏の姿勢は、ソローの「森の生活」をイメージできる。そしてまさに植物図鑑のように対象に対峙し、淡々と撮影する姿勢は、特別賞に相応しいものといえる。

最後に、飛騨野数右衛門賞。激論の末、関西を拠点に長年写真に関わってこられた百々俊二氏に贈られる事となった。今年もノミネートされた中には物故者が多く、その支持の声もあった。しかしながら写真家の顕彰は、やはり生前になされるべきであろう。百々氏の「大阪」は、自身の記憶に基づいた風景をたどり、大阪の人と土地が 8×10 で丹念に撮影された写真集である。その写真は氏の個人的な記憶に留まらずに、“大阪”という懐かしさを伴った共有のイメージを、大阪を知る者にも知らぬ者にも想起させる。また、長年にわたって大阪の写真教育に携わってこられた姿勢も含めて、地域に根付いた活動を長年続けてこられた方に贈られる賞としての受賞者に、最も相応しいという結論となった。大西みつぐ氏の東京と大阪との決戦であったことも念のため記しておく。

東川賞審査会委員　　佐藤時啓

第 27 回東川賞《海外作家賞》"The Overseas Photographer Award"

"Business Class" シリーズより　1996 年

ピーター　ドレスラー（Peter Dressler）ウィーン在住

1942 年ルーマニアのブラショフ生まれ。1966－７１年ウィーン美術アカデミーにて美術を学ぶ。1980－83 年、「オーストリア写真の歴史」展を共同企画し、カタログに寄稿。1989 年、写真文化功労賞をオーストリア連邦官邸から授与される。2001 年、ザルツブルグにあるルペルティヌム近代美術館の写真賞を受賞。2001 年より准教授として教鞭をとる。

1970 年代から、ウィーンを舞台に積極的に作品を発表。文字やラベルを写した写真や、詩的イメージを喚起するキャプションによって、イメージとテクストの関係を重視した作品をつくる。90 年代からは、自身が演じたピクチャーストーリーを収録した、子供の本の装丁を真似たアーティストブックの制作をはじめる。ホテルの備品を盗んでスーツケースに収めようとする場面を写した「Business Class」や、ガウンをまとい、エナメル皮の靴をはき、白手袋をはめた格好で屋内テニスをする「Tie Break」、動物の骨や調度品、絵画、ぬいぐるみといったものの個人コレクションを吟味する姿を写した「Lasting Values」などのシリーズがある。これらの作品は、アイロニーとユーモアの混じったやり方で、公共の空間や、美的価値についての問いを投げかける。

＜作家の言葉＞

４つ星ホテルのエグゼクティブ・ルームで、本能が目覚めて一時的な神経症発作に襲われたかのような客が、客室に備え付けられた備品を外し、スーツケースにしまいはじめる。彼は盗人になる。これは禁じられつつも、よく実践される行動であるのは明らかだ。この客は衝動的に行動しているように見えるが、何か悪いことをしているようには感じていない。／別のシリーズの作品では、広い場所に住んでいる（ドレスラー扮する）住民が登場する。ドレスラーは建物（ウィーン美術アカデミーにある Semper Depot）を一時的に手に入れ、芝生の上でたった一人でテニスをしている。／これらの作品では、即興的に見いだされた場に導かれて、作品が制作されている。過度の縄張り意識のような強制的な行動パターンが、問題含みのグロテスクな格好で暴露される。これらの写真はアイデンティティと場所の関係、そして場所に結びつけられた個々の主権に対する幻影－その本当の、裏面は孤立であり、孤独ですらある―について、明確に焦点をあてている。／映画的な舞台効果を伴ったこれらのシリーズ写真は、精妙なやり方で、孤独とコミュニケーションの間に生じる緊張関係を探求する。そこで問われているのは、対象と観察者の間の基本領域についてである。フェルメールの絵に描かれた、部屋のなかで一人手紙を読む女は、この緊張関係についての一つの例を示している。誰かが鍵穴から彼女を覗いているのだろうか？　画家が彼女を見ているのだろうか？　絵を見ているわれわれが彼女を見ているのだろうか？　ドレスラーは作者であり、演者であり、写真家であり、彼のシリーズの観察者である。これらの思索と解釈の幅が保証しているのは、コンセプトのオリジナリティーと、挑発的で謎めき、内側から揺さぶりをかける作品の質である。

第２７回東川賞《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Award"

12 Speed,CO-7　2008

オノデラユキ（おのでら・ゆき）パリ在住

1962 年東京生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、独学で写真を学び、1991 年に第一回写真新世紀展で優秀賞を授賞。93 年にパリに拠点を移す。2003 年、写真集『カメラキメラ』（水声社）で木村伊兵衛賞受賞。2006 年にはフランスでもっとも権威ある写真賞とされるニエプス賞を受賞。2010 年、東京都写真美術館にて開催された個展「オノデラユキ　写真の迷宮へ」展が評価されて、「芸術選奨　文部科学大臣賞」授賞。

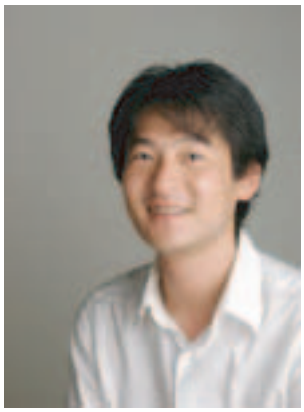
作品シリーズに、空をバックに立たせた古着の不思議な存在感を写した「古着のポートレイト」や、箱型カメラのなかにビー玉を入れて街中の群集を撮った「真珠の作り方」、昆虫の擬態への興味が広がって新聞や雑誌の切抜きをコラージュして撮影した「Transvest」、ローマという地名に導かれて訪れたスウェーデンとスペインにある土地をステレオカメラで片方づつ撮影し、手彩色をほどこした「Roma-Roma」などがある。一般的な写真の概念を軽やかに侵犯しつつ、写真の可能性を様々な形で追求した作品の発表を意欲的に続けている。ヨーロッパ、日本、中国、韓国などで個展をひらくなど、世界的な活動を展開している。

＜作家の言葉＞

今からちょうど 10 年前、2001 年に東川賞新人賞をいただきパリから東川町に来て、その授賞式と展覧会に参加したことを懐かしく思い出します。町が自らお金を使って「文化」に力を注ぎ、人々との関係を様々な意味で限りなく大きく外へと広げて行く。ヨーロッパでは色々な分野でこのようなフェスティバルが数多く、本当に数多く開催されていますが、東川町国際写真フェスティバルの歴史も今年で既に 26 年。本当にすばらしいことだと思っています。

その 10 年後の国内作家賞受賞、感無量です。この 10 年は私の制作活動にとって、大仰な言い方をすれば変化と激動が続いた充実したものでした。写真で何ができるか？写真で何がまだ表現されていないか？写真とは何か？このような問いを常に自分に発し、過去の自作に追随したり安住せず、実験的な試みを続けてきたつもりです。実は新作を発表する度に、今度こそは誰にも理解されず見放される…などと毎回只ならぬ緊張感だけはありました。そんな私が今感じるのは、私の仕事はまだ始まったばかりだということです。これからが本番。もっと密度の高い面白い作品をつくる。今回の受賞に勇気づけられ、これから益々がんばりたいと思います。ありがとうございます。

第27回東川賞《新人作家賞》"The New Photographer Award"



「溶游する都市 /FLOW AND FUSION」
東京ドーム / 東京　1990

北野　謙（きたのけん）東京都在住

1968 年東京都生まれ。1991 年日本大学生産工学部卒業、（有）インテンスインクを経て 1993 年よりフリーランス。2004 年写真の会賞、2007 年日本写真協会新人賞授賞。2010 年には北京の三影堂撮影芸術中心にてアーティスト・イン・レジデンスの後、同美術館にて個展を行う。2011 年第 14 回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞。

1989 年から 95 年頃まで東京の街をスローシャッターでとらえた「溶游する都市」のシリーズを撮影し、2009 年に写真集としてまとめる。99 年から様々な職業、地域、信仰など、ある集団に属する人々を現場に赴いて撮影し、そのポートレイトを均等に多重露光した「our face」プロジェクトを開始する。日本にとどまらずアジア各地での撮影を続け、今後はアメリカ、ヨーロッパ、アフリカでも継続して撮影を行う予定。世界の人を「垂直と水平方向につなげる」という壮大なプロジェクトを展開している。2007 年からは、ある場所の一日を一枚のフィルムに焼付ける「one day」シリーズの撮影をはじめている。

＜作家の言葉＞

存在について考えること———それが僕の仕事です。

受賞の電話を頂いた二日後に震災が起きました。以来時間が変わってしまったようです。

賞に選んで頂いた２つの仕事のうち、「溶游する都市」は 1989 年から 90 年代半ばにかけて、19 歳から 20 代前半の作品です。あの頃すべてが希薄でした。しかし僕は撮ることで〈人も自分も存在している〉こと、そして確かに〈世界が在る〉ことを実感できました。2009 年に大きな写真集にまとめました。20 年余の時を経て、この度評価していただいたことは意外であり幸いです。

一方の「our face」は、世界の他者を訪ね撮影した肖像を〈個の集積〉として、精密な銀塩プリントに重ねて焼き付けています。〈存在〉を延々水平に連ねてゆく。あらゆる人の存在を等価に、そして対称性を持って捉え直すプロジェクトです。1999 年から続けており今後もライフワークとして続きます。

その日の風向きひとつに家族や多くの存在を考えてしまう現実が、今あります。これまでもそうでしたし、きっとこれからも世界や個人は常に閉塞していくに違いありません。それでも時代ごとに、ほとんど奇蹟のように、現実の中から（逆転ホームランのように）素晴らしい芸術が生れて、世界を照らし出します。だから僕にとって芸術について考えることは、希望についてかんがえることです。

この度は賞に選んで頂いてありがとうございます。

第２７回東川賞《特別作家賞》"The Special Award"

トドマツ Abies sachalinensis
2007-2010 年

奥田　實（おくだ・みのる）東川町在住

1948 年埼玉県本庄市生まれ。全国の自然風景を撮影するかたわら、大雪山の大陸的な山岳景観に魅了され、高山植物の美しさと生命力を題材に大雪山の撮影を始める。1986 年、仕事場を北海道東川町に構え、大雪山と周辺の自然を撮影して今日に至る。現在は北海道の原風景である森林を心象風景で表現することを撮影のテーマとする。公益社団法人日本写真家協会会員。

主な著書に『大雪山のお花畑』、『北海道 花の大地』、『大雪山』、『日本の桜』（共著、いずれも山と溪谷社）。日本の落葉広葉樹林と常緑針葉樹林に生育する樹木 150 種に焦点をあてた『生命樹』（新樹社）では、新芽、花、葉、種子、果実など、一年のうちに様々に変化する木々の姿を一枚のページに美しくコラージュし、自分の体験に根ざした解説をほどこしている。

＜作家の言葉＞

東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞いもうしあげます。

私は20代前半から日本全国を訪ね、四季折々の自然を撮影してきました。この間、大雪山の雄大さに魅了され撮影をはじめました。30 代後半に、生活の基盤を埼玉県から大雪山の麓へ移し、高山 . 極寒地に生きる植物たちへの思いを募らせました。その後は、エゾオオカミが君臨していたころの北海道の原風景をイメージし、森の撮影に取り組んでいます。

大雪山に抱かれながらの私の生活は、大地の恩恵を肌で実感するものです。冬の厳しさや春の解放感などにも敏感に反応する日々です。撮影テーマや被写体も、より身近な自然からみつけだすことができます。

『生命樹』は、ここでの暮らしと近隣の自然を撮影するなかから生まれました。本書に掲載した作品の出発点は、森を知るために森を構成する一本の樹をみつめなおすことでした。一個の冬芽、一枚の葉っぱ、一輪の花を見比べることからはじまりました。試行錯誤の末に考えついたものは、花や果実などの “生命の連続” を樹木の特徴を踏まえながらコラージュ表現することでした。また、本としての完成度を高めるために、図鑑の要素もとりいれながら作品集としてまとめることに努めました。

この、“東川賞受賞の言葉” を記すさなか、M9.0 の地震による巨大津波が起きてしまいました。この大震災の映像を見るにつけ、私の生命や生活も自然の微妙なバランスの上にあることを改めておもいしりました。自然の撮影をとおして私に何ができるかを問うています。

被災地の復旧復興を心より祈っております。

2011 年 3 月　奥田　實

第２７回東川賞《飛弾野数右衛門賞》"The Hidano Kazuemon Award"

大阪 都島区京橋　2008.3

百々俊二（どど・しゅんじ）奈良県在住

1947 年大阪生まれ。九州産業大学写真学科卒業。東京写真専門学校教員を経て、72 年より大阪写真専門学校（現ビジュアルアーツ専門学校･大阪）教員、98 年より学校長となる。96 年、『楽土紀伊半島』（ブレーンセンター）で日本写真協会年度賞受賞。99 年、『千年楽土』で第 24 回伊奈信男賞受賞。2007 年、日本写真芸術学会芸術賞受賞。2011 年、写真の会賞受賞。

1972－77 年まで同人誌「地平」を刊行。写真教育にたずさわりながら、一貫して関西を拠点に活動を続ける。90 年から撮影をはじめた「楽土紀伊半島」、96 年から撮影をはじめた「千年楽土」では、奈良、和歌山、三重を往還しながら、決して切り離すことのできない人間と風土の関係を写真に収めた。2007 年、還暦後からはじめた大阪の撮影では、自身の生い立ちの記憶をたどりながら、近代の歴史の痕跡とその「いま」を、猥雑さと静謐さが同居した作品のなかにとどめた。

＜作家の言葉＞

1947 年、大阪に生まれ「大阪の写真家」になることは私にとって自然なことでした。

福岡で写真を学び、専門学校で写真を教え、学生、写真仲間と写真誌「地平」を創刊。大阪に帰り「地平」を続けた 30 才ごろ大阪を活動の拠点として写真を撮り続けることを覚悟した。4×5 カラーで 78 年に写真展「大阪・天王寺」、86 年写真集「新世界むかしも今も」。特に、新世界界隈の人間の体温にむれた下町、人間が人間らしい顔をとりもどせる町が好きでした。そのことが 30 年後の今、「大阪」を 8×10 で撮る力になったと思います。

90 年代は、紀伊半島の風土、自然とそこに生きる人々の物語「楽土紀伊半島」「千年楽土」を制作しました。

2002 年、若い世代の写真家を発見、育てるプロジェクト「ビジュアルアーツフォトアワード」をはじめました。今年で 12 冊の写真集を発刊しました。これらのことをご評価いただき、この賞を受賞したことは私にとって身に余る光栄です。ありがとうございました。